
Re : FINALFANTASY

無限物質

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R e ∴ F I N A L F A N T A S Y

【Nコード】

N 3 6 2 1 J

【作者名】

無限物質

【あらすじ】

F A I N A L F A N T A S Yを愛する、すべての「FFファン」

へ――

これは外伝でも本家でもない、新たなる「一本の柱」であり、新たなる「F A I N A L F A N T A S Y」である。一人の青年は出会いと別れを繰り返し、やがてすべての世界の真実を知っていく……。ゆっくりと迫ってくる心の侵食。徐々に融合していく800もの世界。壊されていくクリスタル。飲まれる運命を待っただけの人類。別世界

からの来訪者。そして、全細胞の融合を迫る一人の人物。彼らの行く手を何度も阻む「いくつもの試練」を超えた先に待つものとは、
いったい・・・！？

序章：新世界

FINAL FANTASYを愛するすべてのユーザーに捧ぐ――

Re..FINAL FANTASY

我々は今日までにいくつものFINAL FANTASYと出会い、いくつもの終わりを見てきた。

あるエンディングはメテオを防ぎ、あるエンディングは魔女を倒し、あるエンディングは緑を取り戻し、あるエンディングは無の脅威から免れた。

この作品名の「Re」には「リメイク」「リターン」「リイマジネーション」「リバース」の意を込めている。

そして、これより記す物語はFINAL FANTASYの新たな「1本の柱」である。

我々が望む「新FINALFANTASY」が完成することを願う・

序章..新世界

地球——我々が住むこの星に与えられた名だ。
この地球も変だ。不思議すぎるほど「神秘的な世界」が広がっている。

さらに、この星に存在する「世界」はなんと「800」も存在する
という・・・

大昔に「ある落下物」の影響で散らばったらしいが、詳細は不明だ。
そして、その800の世界のうちの1つ「第199世界」で、ある
「異変」が起ころうとしていた・・・

―第199世界―

800余りもある世界の中でも人の交流と対立が絶えない「第199世界」。

そんな第199世界には、60ほどの国と2つの大陸が存在する。その2つの大陸は、1つは「大魔大陸」もう1つは「ムーア大陸」である。

今回の最初の舞台は、ムーア大陸に存在する「小ムーア共産主義国」。

その国には、あの「エクスデス」が封印されている「ムーアの大樹」、通称「死を超えし大樹」が都市の中心部に存在するのだ。

1500年前、第199世界とは別世界の場所で、無の力で世界を支配しようとした「エヌオー」と名乗る魔導師の思念が一本の大樹に宿った。

それが「ムーアの大樹」の起源である。

1000年前に「魔導師エヌオー」を含む邪悪な思念が1本の大樹に集結し、「暗黒魔導師エクスデス」が誕生した。

だが、「ギード」と名乗る伝説の賢者が立ち上がり、死闘の末エクスデスは封印された。

その後530年前と500年前に2度も封印を解かれ、世界を無に染めようとしたが、500年前に某勇者によって完全に葬り去られた。

その際に、別世界である「第199世界」にて封印された。

そしてそれから幾年も流れ、現在に至る・・・

その大樹が存在する「小ムーア共産主義国」は現在、とても栄えている国といえよう。

私有財産の所持を禁止し、国有財産を共有することによって貧富の差をなくす政策が成功してからの小ムーアは急激に成長した。

クリスタルの力による「刻印承認制」「階級制」の採用の影響も大きい。

小ムーアは、世界に誇る有数の「クリスタル国」へと成長したのだ。

そんな小ムーア共産主義国に、ある一人の「無名の戦士」がいた。

その戦士の名は——アルタイルⅡシリウン。

年齢は22歳。職種は「戦士」で、階級は「曹長」である。

彼は「第2ムーア城」と呼ばれる城の城下町に住所を置いている。

その彼の家はわずか12坪の平屋建て。

一人暮らしにはちょうどいい家なのかも・・・。

そんな彼は、まだいびきをかいて寝ていた。
しばらくして、まぶたの隙間に光がさした。

アルタイル「ふああ、もう朝か・・・。」

戦士たちは毎朝「第2ムーア城」へ出勤し、夜中に帰ってくるのだ。休みの日は1か月に2日程度。無断欠勤はもつてのほかなのだ。そんな忙しい職種の「戦士」になっていたアルタイルは、いつもの毎朝を迎えた。

彼は気持ちよく背伸びをした。

そのあとゆっくりと起き上がり、しばらくそのままボーっとする。そしてやっとのことで意識が戻る。

アルタイル「よし・・・起きるか・・・。」

アルタイルは布団から出て服を探し、カバンと自分の武器を用意していつもの時間に家を出た。

その玄関を出た先には、いつもの子供たちがガヤガヤと騒いでいた。

アルタイル「はぁ・・・いつからここは子供の遊び場になったんだ？」

子供「ずっと前からー！」

ある子どもがアルタイルに生意気な口で言ったので、アルタイルの手から火が・・・

アルタイル「早く帰らないとファイガするぞー。」

子供「お、大人が子供にそんなことやっちゃ悪いんだぞお!!」

アルタイル「そうだったかなー??」

子供「うわ、逃げろー！」

子供たちはあわてて帰って行った。

アルタイル「さて、今何時・・・・・・・・!!?」

アルタイルは時計を見て跳ね上がるほど驚き、第2ムーア城へ急いで向かう。

その途中の商店街で、アルタイルは急いでいるのに・・・

武器屋「おう、アルじゃねえか。ちよつとこの武器・・・」

アルタイル「いま急いでるんだよ！また夜に行く！！」

武器屋「・・・どうしたんだ？？」

宿屋「あ、アルタイル・・・」

アルタイル「ああ、ムリです！！」

宿屋「・・・？？」

ネーミングウェイ「あ、アルタイル。名前を変え・・・」

アルタイル「知るかぁーっ！！」

ドカーンッ

ネーミングウェイ「あひゃー！」

そんな苦労をしながら、城まで半分の地点まで来た時に・・・

アルタイル「ああ、人とかかわってるとすんごく疲れる・・・。召喚しようかと思ったよ・・・。」

そう呟き、下げていた頭を上にあげると、目の前に「二人の戦士」が歩いていた。

アルタイル「ん・・・？おい。」

ウェッジ「・・・？おい、アル曹長じゃないですかー！！」

ビッグス「あ、曹長。」

そこにいたのは、二等兵のウェッジと軍曹のビッグスであった。

アルタイル「ちょっとまで。なんで2人がそこに？」
ウェッジ「いつもここを通ってるんですけど・・・。」
アルタイル「・・・とか言ってる場合じゃない！！歩いていると遅れるぞ！！」

ビッグスは自分の腕時計を見る。

ビッグス「・・・5時21分か・・・あと9分。」

アルタイル「だから早く行こうぜ？」

ウェッジ「大変だー！遅れるー！」

ウェッジはものすごい速さで城に向かう。
それを見たビッグスもすぐに追いかける。

ダアーツ

アルタイル「速っ・・・。」

アルタイルはふた呼吸ほどの間、体が固まった。

アルタイル「・・・って、こんなことしてる場合じゃなかったんだ、と！」

アルタイルは急いで城に向かう。

そして残りの体力との葛藤の末・・・

アルタイル「はぁ・・・はぁ・・・やっと・・・」

????「はい、武器見せて。」

アルタイル「あ、あぁ・・・。」

アルタイルは、自分の「エクスカリバーII」を見せる。

アルタイル「まったく、毎回毎回・・・って、なんでシドが出欠チェックやってるの？」

シド「逆に質問。なぜエクスカリバーIIを持ってるんだ？」

アルタイル「その質問って俺のさっきの質問と何も関係ないよね？」

シド「5時28分。アルタイルIIシリウン到着。まったく、なんで曹長が最後なんだ？」

アルタイル（無視かよ・・・。）

アルタイルは一瞬イラツときた。

彼の名はシドIIデイメイン。通称「シド少将」。26歳。

わずか19歳で「准尉」になり、25歳で「大佐」になったという驚異的な経歴を持つ。

また、空軍の総合管理局長にも就任しており、周りの一部からは「空長」とも呼ばれている。

シドは今後の活躍が大いに期待されている存在なのだ。

アルタイル「いやあさ、玄関の前で子供たちがさ、遊んでて・・・で・・・。」

シド「事情はいいから、早く入城したほうが・・・。」

シドが話している時にアルタイルが途中で話をとめる。

アルタイル「おおっと、その前にちよいと確認をしたい。」

シド「お、どうした？」

アルタイル「最近また空の様子がおかしくないか・・・？」

アルタイルが深刻そうな表情でシドに話しかける。

その質問に対して、シドは空を見上げて無表情でこたえる。

シド「ああ、またやってくるのか……。」

アルタイル「や、やってくる?？」

シド「そうさ。この空なら……境界放浪者がおそらく来る。」

アルタイル「きょ……境界……んん?」

シド「はあ、曹長なのにそんなのも知らなかったのか……。だったら説明するよ。まずは誤作動追放から説明しよう。」

アルタイル「え?ご、ごさ何?？」

シド「誤作動追放とは、クリスタルによる原因不明の異常反応によって特定の人物が誤って別世界へと飛ばされることだ。」

シド「で、さっき言った境界放浪者ってのは、その飛ばされた人のことを言う。」

アルタイル「原因不明?え、なんで?」

シド「僕に聞かれたって知らないさ。とにかく、そのクリスタルの誤作動で毎回誰かが飛ばされて来るってわけ。」

アルタイル「え、だったらギルガ……」

シド「はいはい、今日はこれぐらいにしろ。ほら、時間が……」
アルタイル「あああーっ!」

アルタイルは急いで城門を通る。

シド「はい、閉門しまーす。」

シドはゆっくりと城門を閉め、城門前の橋をあげた。

第1話に続く

第1話：始まりの日

アルタイル「はあ、今日の空……。な〜んかすごくいやな予感が……。ああ気持ち悪い。」

アルタイルはとても嫌な予感を感じながらも、城へ向かって走る。しばらくしてその予感は見事的中した。

空に大きな異変が起きたのだ。

アルタイルは驚いて空を見上げる。

ゴゴゴゴ……

アルタイル「……。!? あれはシドの言ってたやつか？」

しばらくすると黒い雲に「大きな穴」があき、そこから「一直線の光」が!!

チュドオーン

アルタイル「おおー!!! シドすげー!!!」

シド「アルタイル! 何突っ立ってるんだよ!」

アルタイル「ん? おお、シド。」

後ろからシドが焦った様子で走ってきた。

そのまま横を通り過ぎ、シドは城へと向かった。

アルタイルは、城へと走っていくシドに向かって大きな声で叫んだ。

アルタイル「おーい、一体何があったんだよー! やっぱあの境界なんたらってやつかー!?!」

シド「たぶんそうだと思うけどまだ断定はできな〜い! 気になるんなら城に行けばいい!」

アルタイル「・・・なーんか変な胸騒ぎがしてきた。」

アルタイルも早足で城へと向かう。

一城内一

アルタイルは、開きっぱなしの門を過ぎ、中へ入る。
その様子を見て唾然とした。

アルタイル「うわ・・・なんだこれ・・・。」

シド「僕がここに来た時には境界放浪者はいなかった。でもさすがにこれはひどいな・・・。」

天井に大きな穴が開いており、床にはガレキがたくさん散らばっていた。

アルタイルは、天井にできた大きな穴をのぞいてみる。

アルタイル「・・・綺麗に一直線だなあ・・・。」

シド「この天井を貫いてやってきたんだろうな。すごいことしてくれるよ。」

アルタイル「また無駄な修理費用がかかるな。だから国が財政で苦労するわけだ。」

シド「そんなこと言わない言わない。」

アルタイル「あ、はい。」

2人が話していると、後ろから「一人の男」が歩いてきた。

??? 「おお、やっとやっときたかー！遅かったじゃねえか！！」
シド「・・・？・・・！？ギ・・・ギルガメツシュ・・・！！！」

そこにいたのは、2か月前に別世界からやってきた「ギルガメツシュ」であった。

彼は以前にもこの世界に來た経験が何度もあるらしく、総合計で70回だとか・・・。

とにかく、彼の最大の特徴と言えはなんといっても「8本腕」と「武器マニア」であろう。

そんなギルガメツシュが、ゆっくりと後ろからやってきたのだ。

ギルガメツシュ「さっき150cmぐらいの女の子が天井突っ切ってきたんだよ！」

シド「やってきたのは女なのか？」

ギルガメツシュ「そいつさ、柱ぶっ壊したり階段ぼろぼろにしたり、半端じゃねえ！！！」

アルタイル「へえ、すごいねー。で？」

アルタイルのあまりの緊張感のなさに呆れてシドは・・・

シド「アルタイル。」

アルタイル「え、ちょ、何？」

柱の裏にアルタイルは連れて行かれた。

しばらくして、アルタイルが全身真っ黒焦げで帰ってきた。

ギルガメツシュ「ど、どうしたんだアル・・・。」

アルタイル「シド、あんた馬鹿じゃ・・・ゴフッ」

シドから背中を突かれる。

シド「で、その子の行方は？」

ギルガメツシュ「あ？その子？まだ城の中にいるぞ。んでザックスとリオが今追ってるよ。一応な。ちなみに、おれも後でそこに行くつもりだ。ったく、運がないなこの城も。」

シド「リオも行ったのか……。」

シドは腕を組んでしばらく黙りこむ。

アルタイル「……リオって、あんたの妹でしょ？」

シド「ああ、そうだよ。」

アルタイル「ってか、この焦げ何とかしろよ。」

シド「じゃあウォーターガ。」

ザパアーツ

アルタイル「うおおー！？」

アルタイルは水流の勢いでおぼれそうになる。
しばらくしてアルタイルが出てきた。

バサーン

アルタイル「ぷはっ！！」

シド「おー生きてたかー。」

アルタイル「殺す気か！！」

シド「あんたが無礼な行為をしたのがそもそもいけないんだぞ？」

アルタイル（こ、こいつ……）

ギルガメツシュ「……。」

ギルガメツシュは咳払いをし、改めて話を始める。

ギルガメツシュ「んじゃ、その境界放浪者について少し情報を教えてどうか。」

アルタイル「情報って、その女の子の?」

ギルガメツシュ「ああ、そうだよ。」

シド(・・・)

ギルガメツシュ「でその子は第601世界から来たらしくてな、その世界の王女だったらしい・・・。」

ギルガメツシュは異様に高いテンションでアルタイルらに教える。

ギルガメツシュ「いやーうらやましいぜ!俺も王子だったら・・・」
アルタイル「ほおほお、王女か。」

シド「あんたら今いやらしいこと考えてるでしょ?」

アルタイル「ぐ・・・。」

アルタイルは別視線に目をそらす。

そこにギルガメツシュが再び咳払いをする。

ギルガメツシュ「でも残念なことに、その王女様を処分することになった。」

アルタイルの両目が大きく開く。

アルタイル「は? 処分・・・? あんた正気かよ!」

ギルガメツシュ「俺のせいにするなよ? しょうがないって、決めたことなんだからな。」

ギルガメツシュは身振り手振りしながらアルタイルに事情を交えて説明する。

アルタイル「だからって女の子を殺るわけにはいかないだろう？」
ギルガメッシュ「できれば俺だって救いてえよ。でもなく城ぶっ壊してるしなく・・・。」

ギルガメッシュ「そう考えれば強行手段をとるしか・・・って思っちゃうんだよねー。」

アルタイル「俺は反対するね。大体さ、俺ら戦士がそんな動きをするからその子も警戒するわけだろう？」

ギルガメッシュ「だからそれ以外の方法はねえって。」

アルタイルは、一つの決断をする。

アルタイル「・・・だったらその戦いを中止させてやるよ。」

シド「・・・!？」

アルタイル「あんたらはさ、相手が誰だろうがどうせ容赦する気ないんだろ？見ず知らずの相手なら斬るんだろ？」

シド「あんたは何を考えて・・・」

アルタイル「排除するとか処分するとか、そんな考え絶対腐ってる！」

シド「違う！そういうのじゃなくて・・・」

アルタイル「・・・残念だけど、これ以上縛られるのはごめんだ。」
シド「・・・。」

シドは、そのままうつむく。

アルタイル「なんとしてでも俺は止めてくる。」

ギルガメッシュ「・・・おいアル、本当にそれができるのか？」

アルタイル「絶対にやってやるよ、必ず。」

ギルガメッシュ「・・・だったら行ってきな。んでそこでちゃんとやってこい。」

アルタイル「ああ!!」

ギルガメツシュ「言っとくけど、あんたが行ったところには戦いが終わってるかも知んねえ……。」

アルタイル「……?」

ギルガメツシュ「もし終わっていたら、そのときは傷の手当てをしろ! わかったか!!」

アルタイル「……わかった!」

アルタイルは崩れかけの階段を上り、そのまま向かった。

シド「あいつ……(てかその前に場所を知らないんじゃ……?)」

シド「でもギルガメツシュ、あれはどういうことだ?」

ギルガメツシュ「みんな倒れて帰ってくるはずだ。戦士の戦いは一瞬で決着がつくもの。大抵の野郎どもは相打ちになるさ。」

ギルガメツシュ「でも、アルのあの行動には感動するぜ。」

シド「……。」

ギルガメツシュは、その場で背伸びをする。

ギルガメツシュ「んじゃ、俺は部屋に戻るぜ。」

シド「休養を取るのか?」

ギルガメツシュ「あいつが行くんなら俺が出向く必要ないだろ? それに腰痛いしな。」

シド「……。」

ギルガメツシュ「それじゃシド、またな。」

ギルガメツシュはその場から去っていった。

ギルガメツシュ(アル、がんばれよ……!!)

シドは、ギルガメッシュが部屋へと向かう姿を最後まで見送った。
そのシドの近くに上等兵が近づいてきた。

周りを見渡してみると、いつの間にか一二等兵でいっぱいになっていた。

上等兵「シド殿!!」

シド「ん? あ、どうした?」

上等兵「われわれに、ご命令を!!」

シド「え? あ、うむ・・・では、まずはガレキの回収をせよ。」
上等兵「ははっ!!」

シドもまた、仕事に取り掛かり始めた。

この城には、世界最大級の広さを誇る中庭が存在する。

その中庭こそが「第2ムーア城内大庭園」である。

そこに広がる花畑の迷路や柱の彫刻の数々はどれも芸術。

誰が見ても圧巻されるであろうこの迫力。

世界が認めたこの中庭は、とにかく素晴らしい所だらけなのである。

だがそんな中庭で、ある3人がそれぞれの剣を交えていた・・・。

カンッ

ドンッ

ザックス「うおおっ!?!」

そこにいたのは、「ザックスⅡフェア」と「リオⅡディメイン」と「某国の王女」であった。

そのザックスが、先ほど勢い良く吹き飛ばされた模様。

そしてそのまま柱にぶつかって粉々になった様子。

ドーンッ

ザックス「くう・・・いてて・・・」

リオ「ザックス!!!」

リオがザックスに駆け寄ろうとしたが、目の前に突然「王女」が移動してきた。

???「もう、これ以上やめたらどうなのです!!」

リオ「く……。あんたさ、名前を名乗ったらどうなのよ？」

アイ「申し遅れた。私はアイⅡクラウドスⅡベガと申す。」

リオ「へえ、なかなかいい名前じゃないのっ!!」

リオは、自分の武器「村正」でアイに切りかかるが、アイが「ある2つの武器」で止めた。

ガンッ!

アイ「なぜ私を狙う……。!!いくら私がよそ者だと言え、その扱いはあまりにも卑劣だと思わないのか？」

リオ「あんたその武器……。!?『アルテマウェポン』と『オメガウェポン』じゃないの!？」

そう、その「アイ」と名乗る王女が持つその武器は、あの伝説の「アルテマウェポン」と「オメガウェポン」だったのだ!

アルテマウェポン…VIIプレイ済みの人ならおそらくわかるはず。オメガウェポン…アルウェポの銀色バージョン。

リオは、その圧倒的な力を前にして吹き飛ばされた。

この戦いは2対1。それなのに2人を圧倒するとは……。どれほどの実力を持つのか全くの未知数だ。

リオ「ぐ……。」

リオが起き上がりしているところに、アルテマウェポンの刃が向けられた。

アイ「これ以上無駄な戦いをやる気はない。もう一度問おう。なぜ

私を殺ろうとする？」

リオ「うちはただセフィロスに命じられただけって！だから・・・」
アイ「人のせいにするとは・・・。あなたは外道すぎる！」

2人がそう話していると、アイの後ろからザックスがロングソードを降りかざした！

アイはそれに反応して、瞬時にオメガウェポンで防ぐ。

ガアンツ

ザックス「うおっ！？」

アイ「・・・。」

ザックス「やるねー。でも王女が武器持ちちゃダメだろ？王女は王女らしく・・・」

アイ「王女だからと言って戦ってはいけない決まりがあるとしても・・・言うのですか・・・。」

ザックス「・・・。」

アイ「私は、王女としての誇りを持って・・・ずっと戦うつもりだ。でもこんな無駄な戦いをする気は・・・ない！！」

アイはアルテマウェポンを横に振りまわし、ザックスを再び吹き飛ばす。

ザックスはすぐに立ち上がり、地面を蹴ってとびかかってきた！
反対側のリオも、村正片手に降りかかる！

真ん中に位置するアイは精神統一し、両手に持つ2つの武器を構える。

そして、左右からそれぞれ迫ってくるザックスとリオを前に、アイはそれぞれ弾き返した。

そして、そこでよろめく2人に「回転斬り」を喰らわした！

ズザザアーツ

リオ「うあっ!？」

ザックス「ぐああーっ!！」

ズザアーツ

吹き飛ばされた2人は、柱に激しく叩きつけられた。

アイも攻撃直後に倒れ、体力をほとんど使い果たした。

アイは痛む場所を抑える。

アイ「くうっ……。」

ザックス「ったく……なんだってんだよ……。」

リオ「……。」

3人それぞれが倒れている時に、「噂のあいつ」がやっとやってきた。

その人は、もちろん「アルタイル」のことである。

アルタイル「……!？」

アルタイルから見た視線でも血が散乱しているのがすぐわかる。

アルタイル「ギルガメッシュが言ってた通り、たしかに終わってる・
・けどこれはひどい……。」

アルタイルは、この広い広い中庭を走り抜ける。

花畑に咲く花が風の勢いで散る中、アルタイルは3人のもとへと駆け付ける。

アルタイル「みんな大丈夫か!？」

リオ「アル!?!なんであんたが来たの!？」

アルタイル「え、いや・・・来ちゃダメなのか？」

リオ「いや、そういうことでもないけど・・・。ぐ・・・。」

リオは、横腹の傷をおさえる。

アルタイル「おい、大丈夫か？」

リオ「あんたに心配されるほど怪我してません!!そんなことより、あっちの人をどうにかした方が・・・」

アルタイル「あ、ああ・・・。」

アルタイルの視線の先にあったのは、あの王女が倒れていた姿であった。

その者は、黄色のショートカットに青い目の色の、キリツとした目つきの女の子であった。

アルタイルは、ドレス姿等からこの人物が王女だと確信する。

アルタイルは近くに駆け寄り、ゆっくりと揺さぶる。

アルタイル「おい、大丈夫か、おい?」

もう一度揺さぶるが・・・どうやら意識がないらしい。

アルタイルはその場で王女を抱きかかえた。

アルタイル「よっこいしょ、と。」

リオ「あんた・・・女、大丈夫だったんだね・・・。」

アルタイル「一応だけだな。でも・・・服装のせいかなんか重いな・・・。」

その影響でアルタイルの足が少し震えだした。

リオ「それとザックスどうしょっか・・・」

アルタイル「ザックス？・・・てかそんな余裕ない！！俺は走って城に行く！！うおぉーっ！！」

アルタイルは王女を抱いたままダッシュで中庭を駆け抜け、城の中へとはいって行った。

リオ「おゝ、力あるねゝ！さてと。おゝい、ザックスゝ、起きるよゝ。」

ザックス「・・・？ううん・・・。」

リオ「だめだ。あとで引っ叩いてやないと起きそうにもない。」

リオはザックスの所からいったん離れる。

リオ「そろそろセフィロスの所に連絡しないとね。」

リオは通信機を取り出して電源を入れた。

ジジジ・・・

リオ「あ、特階本部？」

クラウド「こちら特別階級兵隊本部。」

リオ「うちら本気でやろうとしたんだけど強かったんよ！」

クラウド「突然何の話だ？失敗したのか？」

リオ「違うって！だから話聞いてって！」

クラウド「んじゃあ言い訳か？」

リオ「それも違う！！」

クラウド「・・・。」

クラウドはため息をつく。

リオ「でさ、途中からアルタイルがなぜか乱入してきて、そのままお姫様抱えてどっか行ったんよ！」

クラウド「なぜアルタイルが・・・？」

リオ「うちは知らないって！とにかく来たんだよこっちに！」
クラウド「報告どうも。切るぞ。」

リオ「え、ちょ・・・」
ブチッ

途中で切れた。

リオ「・・・チョコボ頭ったら、馬鹿じゃないの!？」

ー特別階級兵隊本部室ー

ここは「特別階級兵」と呼ばれる戦士たちの本部の部屋である。
上記のように呼ばれる戦士は数名に限られている。

ザックス。アンジール。ジェネシス。リオ。クラウド。そしてセフィロス。

この6人の戦士は、誰からの命令も受けることのない特別な戦士達なのである

しかも普通の戦士とは違って、行動範囲制限が一切ないという特徴もある。

それらを利用した任務を行うのも彼ら特有のもの。

そんな彼らもいろいろと忙しいのだ・・・。

ガチャッ

クラウド「はぁ・・・。」

セフィロス「今のはリオからの通信か？」

クラウド「ああ。」

セフィロス「どうせ失敗の連絡なのだろう？」

クラウド「失敗・・・というわけでもないが、それがどうかしたのか？」

セフィロス「あいつが残す結果はいつも中途半端だな・・・」
クラウド「・・・。」

しばらく空気が静まる。

セフィロス「・・・だが、リオの腕前は確かだ。」

クラウド「貶した後は褒めるのか。」

セフィロス「俺が渡した村正を、リオはわずか1か月でマスターした。」

セフィロス「あの手さばきには驚かされる。まあ、あの技を戦場で生かせたらよいのだがな・・・。」

クラウド「興味無いね。」

セフィロス「・・・。」

しばらくして、セフィロスは天井を見上げる。

セフィロス「あー・・・通信時に言えばよかったか・・・。」

クラウド「何のことだ？」

セフィロス「特別階級兵隊の会議の連絡のことだ。まあ、後で連絡

すればいいことだ。」
クラウド「……。」

セフィロスはそこから立ち上がる。

セフィロス「あとでアンジールにも連絡しといてくれ。」
クラウド「ああ。わかった。」

セフィロス「それと、俺は用があって行く所があるから、ここ留守頼むぞ。」

クラウド「……了解。」

そう言うと、セフィロスはドアのロックを解除してどこかへと歩いて行った。

クラウドはさっそく通信機を片手にアンジールへと発信するのであった。

Z. E 208 12 / 2 6..22

第2話に続く

第1話：始まりの日（後書き）

どうも、無限物質です。

今回のお話いかがだったでしょうか？

誤字脱字や要望等がありましたら、感想かメールで送ってください。

また、5・7・9で出してほしいキャラクターがあるのなら「要望」という形で投稿してください。

ちなみにセフィロスの一人称が「俺」になっている理由は・・・V
IIプレイ済みの方ならわかるはずです。

文章表現力のない自分ですが、引き続き「ReFF」をよろしくお
願いします。

第2話：穏やかな一日

境界放浪者騒動で城がパニック状態になった小ムーア共産主義国。

そんな日もあつという間に過ぎ、翌日となった。

一翌日一

アルタイルの家にも朝が来た。

カーテンの隙間から光が漏れ、その光がアルタイルの目を照らす。

アルタイル「う・・・うん・・・。おお、もう朝か・・・。」

アルタイルは、ぼさぼさ頭のセットをしに洗面所に行き、その洗面所で顔を洗って歯も磨いた。

すっきりしたアルタイルは自分の部屋に戻り、服の山の中から無理やり制服を取り出す。

服の山が崩れるが気にしない様子のアルタイル。

しばらくしてアルタイルは着替えが完了した。

その後、あらかじめ用意していたバッグと武器を手にして、ゆつくりと家を出た。

その玄関先でいつものように暴れる子供たちを追い払い、いつものように商店街を通る。

アルタイル「おじちゃん！エリクサー！」

店長「はいよ！お代はいらないからさっさといきな！」

アルタイル「え、いいのか！？」

店長「いわゆるサービス精神ってやつだよ！」

アルタイル「おじちゃんありがとな！」

そんな会話を通勤中によくするアルタイル。
そしてまたここで・・・

アルタイル「・・・！？またあの2人・・・！！」

そう、目の前にいたのは、昨日通勤中にバッタリとあつたビッグスとウェッジだったのだ。

ウェッジ「？？おー、アル曹長！！おはようございます！！」

アルタイル「あ、おはよう・・・。」

ビッグス「曹長、おはようございます。」

アルタイル「おはよう・・・（あー、なんで今日もこんなところで・・・）。」

アルタイルは心の中でそうつぶやく。

アルタイルの心境を知らないウェッジは今日もハイテンションのようだ。

ウェッジ「曹長、昨日は大変でしたねー！！曹長は昨日何をされてたんですか？？」

アルタイル「え、あー、昨日？ええっと・・・」

ウェッジ「みずくさいですよー曹長ー！！教えてくれたっていいじゃないですかー！！」

アルタイル「とにかく昨日は色々あったってことで。」

ウェッジ「・・・なんですかそれ？」

アルタイル「だから昨日は昨日！！じゃあな！」

アルタイルはその場をしのぐために早く話を片付けて、城へと走って行った。

ウェッジ「・・・。」

ビッグス「曹長はウェッジにうんざりしてるんじゃないのか？」

ウェッジ「いや、それないでしょー！！アル曹長絶対そう思っていないよー！！」

ビッグス「あの様子からして絶対そうだと感じたのだが・・・。」

ウェッジ「考えすぎだよー！！」

ビッグス「ならいいのだが・・・。」

勘違い人間たちは今日も頑張る・・・。

それからしばらくして、アルタイルは城に到着した。

アルタイル「ふう・・・。」

「???」「武器を見せろ。」

アルタイル「今日のチェックはバイエルか。」

バイエル「何か悪いことがあるとでも？」

アルタイル「いや、とくにないのだが・・・。」

彼の名はシン・バイエル。年齢は53歳。

過去の経歴は一切不明で、唯一わかることは名前と年齢ぐらいだ。6年前に突然城にやってきて、彼は政治改革を宣言した。

その後3度にわたって財政改革を行った。
彼は非常に強い権力を持っているのだ。

そんな謎の人物が今日、出席チェックの担当をしていた。

アルタイル「ほら、武器。」

バイエル「武器確認。アルタイルⅡシリウン・・・シリウン・・・
シリ・・・ウン・・・。」

アルタイル「どうした？」

バイエル「いや、なんでもない・・・。5時11分到着。」

アルタイル「毎回だるいなあ。チェックとかさ、どうでもいいよ・・・。」

バイエル「しょうがない。それが義務なのだからな。」

バイエルはチェック表を地面に置く。

バイエル「さて、時間がなくなってきた。行かなければな。」

アルタイル「え、行くなって・・・？でもチェック係は最後まで居ないと悪いんじゃない？」

バイエル「代わりの者を置くつもりだ。では。」

バイエルは城からそのまま離れていった。

バイエル「シリウン・・・か。「アルタイル」はどうやらここにいたようだな・・・。」

バイエルはそう呟き、どこかへと向かった。

アルタイル「・・・？まあいいか。とりあえず入城しよう。」

アルタイルは首をかしげながらも城へと入る。

一城内一

どうやらまだ昨日の回収はできていないようだ。

アルタイルはその現場を通り過ぎ、階段を上って左の通路へとさしかかったとき、シドとぶつかる。

ドンッ

アルタイル「うあっ!？」

バタン

アルタイル「いったあ……。……。!? シドじゃないか!!」

シド「アルタイル!! あんた前をちゃんと見ろよ!!」

アルタイル「それ、シドにも言えることでしょ!!」

シド「う……。」

シドとアルタイルはゆっくりと立つ。

シド「そういえば、バイエル中将はどこへ行ったか知っているか？」

アルタイル「え? あ……。まあいいか。」

シド「おい、何か知っているのか？」

アルタイル「なんかどっか行くところがあるとか言っただけでどっか行っただ。」

シド「はぁ……。まあそこは突っ込まないでしょう。」

アルタイル「とにかく、おれは用があるから。じゃあな。」

シド「昨日の子に用があるんだろう? なら今はたずねるな。」

アルタイルの動きが止まる。

アルタイル「は……？」

シド「昨日の……アイという名前だったか？」

アルタイル「アイ……？あの子の名前か……？」

シド「そうらしい。で、その子が昨日承認試験を受けた。」

アルタイル「承認試験……？戦士の刻印もらうためにか……？」

シド「いや、元帥からの命令で受けさせられたそうさ。いわゆる「強制」ってやつさ。」

アルタイル「……てか王女様がそんなことしていいのか……。」

アルタイルは小さい疑問を抱く。

シド「その王女様は試験に合格した。」

アルタイル「まじかよ……。」

シド「情報によると、伍長の資格を得たとのことだ。」

アルタイル「伍長……？飛び級すぎだよ……。」

シド「戦士の刻印も焼いてもらったそうだが……。」

アルタイル「驚くよう。刻印もうもらったなんて……。で、本人は喜んでたの？」

シド「なんか乗り気じゃなかったな、あの顔……。」

アルタイル「合格したのに？」

シド「ああ……。」

アルタイルは再び背中を向ける。

アルタイル「ま、今後頑張ればいいさ、その王女様も。」

シド「……だな。」

アルタイル「んじゃ俺行くよ。じゃあな。」

シド「……。」

それから時間は過ぎ、夕方の5時をまわった。
アルタイルはいつもこの時間帯に休憩が入る。
そして休憩の時間が来た。

アルタイル「うおー！休憩TIMEー！！」

アルタイルは興奮し、そのまま「某本部」のドアにぶつかる。

ドオンッ

アルタイル「ぶほっ！」

クラウド「何の音だ？」

クラウドは椅子から立って、ドアのガラスをのぞく。

アルタイル「クラウド。」

クラウド「アルタイル……！？」

クラウドはドアのロックを解除し、アルタイルの中に入れる。

アルタイル「へえ……中はこうなってるんだ……。」

クラウド「何しに来た？用がないなら帰ってくれ。」

アルタイル「今日はここで休憩時間を過ごす……！！」

クラウド「……。」

アルタイル「……というわけなんでここで過ごさせてくださいな
。」

クラウド「やっぱり帰ってくれ。」

クラウドは無理やりアルタイルを部屋から押し出して、そのままドアをロックした。

ガチャッ

アルタイル「おーい、開けてくれよー!!」

ガンッ

ガンッ

ドンッ

バンッ

クラウド「傷がつくから暴れないでくれ。」

アルタイル「なんだよそれ・・・。」

アルタイルはあきらめて後ろに向いた。

その視野の中に突然「リオ」が入ってきた。

アルタイル「うおおっ!? な、おおあ!？」

リオ「変なりアクションしないでよ!」

アルタイル「あんたがいるとは思わなかったからさ・・・。」

リオ「あたしは特別階級兵隊の1人です! 忘れてるの?」

アルタイル「あんたがなぜなったのか、不思議でしょうがないのだから?」

そういった直後に、リオから背中にし蹴りされた。

バンッ

アルタイル「ごはあっ!？」

アルタイルは地面にひざをついた。

アルタイルは顔を上に向け、文句を言いだす。

アルタイル「暴力女！悪女！鬼！人でなし！」

そういうと今度はおでこを蹴上げられた。

アルタイルはそのまま地面に倒れ、ノックアウトされた。

バタンツ

アルタイル「ま、まいりました・・・。」

リオ「男なのに情けないね。ほら立ってよ。」

アルタイルはリオの手を借りて立った。

アルタイル「うおお・・・いてえよお・・・。なんでこんな目に遭わなきゃ・・・。」

リオ「うちは悪くないということ。」

アルタイル「なんでそうなるの!？」

リオ「じゃあね。」

リオはパスワード入力して部屋の中へと入った。

アルタイルは走って中に入ろうとするがギリギリ間に合わず、またドアに激突する。

ドオンツ

アルタイル「ぶほおっ!？」

アルタイルは結局入ることができず、そのまま休憩時間が終わることとなった。

そして仕事が終わったのは午前0時すぎであった・・・。
アルタイルは背伸びをする。

アルタイル「ふっ・・・ああー・・・」

シド「今日も仕事お疲れ。」

アルタイル「お疲れじゃないよ。疲労たっぷりだよ。」

シド「俺はあんたよりも大変だ。なにせ、少将だからな。」

アルタイル「俺はまだ曹長か・・・。はあ、出世してえよ。」

アルタイルとシドはチェックを終えて城と一緒に出た。

アルタイル「そういえば、8本腕弁慶はどうした？」

シド「（8本腕弁慶・・・。）ギルガメッシュは熱で今ダウンしている。」

アルタイル「熱？あいつが？」

シド「今40度の熱で苦しんでるっぽいよ。」

アルタイル「ギャハハハハ！こりゃ傑作だ！」

アルタイルは腹を押さえて激しく笑い、地面にそのまま倒れこむ。

シド「・・・そんなにおかしいのか？」

アルタイル「あいつが熱とか、プハハハッ！」

シド「ギルガメッシュが聞いてたら絶対怒るだろうな・・・。」

シドはそう言いながらアルタイルを起こす。

しばらくして、シドと「いつも別れる場所」に来た。

アルタイル「ああ、マジで大丈夫なのだろうか・・・。」

シド「心配することはないと思うよ。何せギルガメッシュなんだからな。」

アルタイル「そうだよな！！」

シド「・・・じゃあな。」

アルタイル「明日も頑張ろうなー!!」

シド「頑張るさ、必ずな!!!」

シドはアルタイルと別の道を通って自分の家へと帰って行った。

アルタイル「・・・さてと、早く家に帰らないとな。」

この時点でもうすでに1時をまわろうとしていた。

そして、家に着いたのは1時10分ごろであった・・・。

アルタイル「ふう・・・やっと家に帰った・・・。・・・ん？」

アルタイルは、玄関扉の窓から明かりが漏れているのを目にした。

アルタイル「・・・？中に人がいるのか!？」

アルタイルがノブを引いても開かない。

閉まっている!

アルタイルは急いでカギで開けた。

ガチャッ

アルタイル「誰だ!!」

アルタイルは剣を握りしめて、走ってリビングへ向かった。

そしてその部屋のドアを開けた先に・・・

???「帰りをお待ちしておりました。」

アルタイル「な・・・え・・・!？」

そこにいたのは、この前の騒動の元となったあの王女であった。

服装は城の制服で、そこに正座をして座っていた。

アルタイル「え、ちょ、……えええええ……。」

アイ「勝手に家に上がって申し訳ございません。」

アルタイル「なにがなんだが……。」

アルタイル「いや、え、なんでいるの!？」

アイ「申し遅れました。私はアイ||クラウス||ベガと言います。」

アルタイル「今のタイミングで名前を言うのかよ……。」

アルタイル「で、なんでここに!？」

アイ「いろいろと事情がありまして、しばらくこちらで住まわさせていただきます。」

アルタイル「す、住む……!？」

アルタイルの脳内は完全に混乱していた。

アルタイル「住民登録は？」

アイ「しました。」

アルタイル「戸籍登録は？」

アイ「しました。」

アルタイル「住所報告は？」

アイ「しました。」

アルタイル「年金関係の登録は？」

アイ「しました。」

アルタイル「戦士刻印は？」

アイ「しました……が、お見せすることはできません。」

アルタイル「あああああー!!!!」

アルタイルは完全にパニックになった。

アルタイルはその場で頭を抱え込む。

アイが近くに駆け寄る。

アイ「どうかされたのですか!？」

アルタイル「うおおおおーっ!!」

アイ「これは大変です……。」

アイはアルタイルを慎重にソファまで誘導して、そのまま安静させた。

そして時刻は3時をまわった。

アルタイル「とりあえず落ち着いたのはいいものの……未だに意味がわからないよ……。」

アイ「突然のことで本当にすいません。でも、先ほども言いましたように諸事情があるのでここで住まわさせていただきます。」

アルタイル「確かに1人暮らしでスペース……はないんだがホントにこの家に住むのか？」

アイ「はい。」

アルタイル（即答だな……。）

アルタイルは頭をかく。

そのあとしばらく黙りこむ。

どうやら何か考えているようだ。

アイ「どうなさいましたか？」

アルタイル「……寝る部屋はリビングでいいか？」

アイ「ええ、いいですけど、なにかあるのですか？」

アルタイル「いや、別にないのだが……。」

アルタイルはゆっくりと立った。

アルタイル「さて、俺はそろそろ寝るとする。寝るときの服はそこにあると思うからそこから取って着替えてくれ。」

そういってアルタイルは自分の寝室に入った。

アルタイルは電気をつけ、そのままベッドに飛び込む。

アルタイル「……。突然王女様が目の前に現われました……。意味が分かんないよな……。」

アルタイル「ここに来る理由はないはず。それにしても……。なんでここだ？」

アルタイルは天井を見つめながら考える。

アスタイル「大体いきなりすぎるって。誰かと思って入ったらお姫様……。」

アルタイル「今になっても理解不能だ……。」

アルタイルはそのまま寝る用意をし、電気を消して静かに布団に入った。

Z. E 208 12 / 4 03..41

第3話に続く！

第2話：穏やかな一日（後書き）

どうも、無限物質です。

次回からついに本編に入ります。もちろん戦いも本格的に始動します。

ゆっくりとスタートさせるつもりなのでそのつもりでよろしくです

（^―^；）

お楽しみに。

第3話：緊急会議

そして、いつもとは異和感のある朝が来る。

ゴンゴンッ

アイ「入ってもよろしいですか？」

アルタイル「う．．．ん．．．．．．．．．？」

アルタイルの視線の先には、青いパジャマを着たアイがいた。

アルタイルは机に手を伸ばし、時計を確認する。

アルタイル「．．．4時10分じゃないか．．．。」

アイ「私は昨日からずっと起きております。さあ、早く起きましよう。」

アルタイル「昨日からって．．．．．。」

アルタイルは渋々とベットを降りる。

アルタイル「俺30分も寝てないぞ．．．。」

アイ「時間厳守が基本です。」

アルタイル「はあ．．．。」

アイ「ところで、貴方の名前はアルタイルⅡシリウンでよろしいでしょうか？」

アルタイル「そうだが．．．。」

アイ「これからはなんと呼びすればいいのでしょうか？」

アルタイル「ふつうに呼び捨てで「アル」って呼んでくれ．．．。」

アイ「はい、ではこれからはアルと呼ぶことにします。」

アルタイルは、ふらつきながらも布団の整理をする。
頭がまだ起きていないようだ。

アルタイル「ええっと・・・アイは寝ていないってさっき言ったよな・・・？」

アイ「はい、そうですが、なにか・・・？」

アルタイル「王女様が寝なくてどうすんだよ・・・。」

アイ「いいですよ、私は。」

アルタイル「いいって・・・でも今日一日やって眠たくなるぞ・・・？」

アイ「これからは私とアルとの共同生活なのです。これしきのこと
でそんなことになったりは・・・」

そう話しているうちにアルタイルの布団整理は終わり、アイの横を
横切って部屋を出る。

アルタイル「さて、そろそろ服と武器を用意するぞ・・・。」

アイ「はい。わかりました。」

アイはアルタイルと一緒に部屋に向かう。

先にアルタイルがリビングに入った。

とその時、アルタイルが目にしたものは・・・

アルタイル「な・・・！？」

壁に立てかけてあったのは、なんと「4つ」の大剣だったのだ！
アルタイルの眠気も一気に吹き飛んだ。

アイ「どうかされたのですか？」

アルタイル「なんだ、あれ……。」

アイ「あれは私の武器です。」

アルタイル「4つともか？」

アイ「はい、そうですが……。」

アルタイル（ええええええええ……。）

アルタイルは驚愕した。

アルタイル「端から名前を言ってくれ……。」

アイ「端からオメガウエポン、ダイヤウエポン、アルテマウエポン、ルビーウエポンです。」

アルタイル「あ……ああ……。」

アルタイルはさらに驚く。

アルタイル「……ええっと……んじゃあ、とりあえず用意しようか……。」

アイ「そうしましょう。」

2人は自分の服の用意や武器などを用意し始めた。

そして10分後——

アルタイル「おい、できたか？俺はできたー！」

アイ「もう少しお待ちくださいー！」

アルタイル「……。」

そして2分後。

アイ「遅くなってすいません。」

アルタイル「お、準備できたか……って、武器は？」

アイ「今から持っていきます。」

アイ「ええっと、今日はルビーウェポンで……。さあ、行きましょう。」

アルタイル「……。!?」

王女が大剣を軽々と持っている光景にアルタイルはとても驚く。

アイ「どうかされましたか？」

アルタイル「いや……。んじゃ、行くぞ。」

アイ「はい。」

そう言っ外に出ると、いつもの子供たちが外で騒いでいた。

アルタイル「(ギクッ)下がっていてくれ。」

アイ「……。?」

アイは言われたとおりに後ろに下がった。

子供「お、アルプス山脈!」

アルタイル「アルタイルだ!」

子供「頭もアルプス山脈ー!!」

子供「ハハハハ!」

アルタイル「お前らしい加減にしろおーっ!」

そういうとアルタイルはエクスカリバーIIを地面にたたきつけた。

バンッ

子供「うおあ!」

子供「ぎゃー!逃げろー!」

子供たちはいつものように逃げて行った。

アルタイルは玄関を開け、アイを外に出す。

アイ「どうされたのですか？外で何かあったようですが・・・。」
アルタイル「いや、なんでもない。子供たちがここで暴れていただけだ。」

アイ「・・・。」

アルタイル「・・・行くぞ。」

アイ「あ、はい。」

そして2人は商店街の道へと入る。

朝なのに人がとても賑わっている。

今日はどうやら朝市の日のようだ。

そんな商店街をゆっくりと通る。

その2人に、宿屋の人が話しかけた。

宿屋「お、今日は彼女と通勤中なのかい？」

アルタイル「ち、違うって！勘違いしないでくれ！」

横を向けば赤面のアイが・・・

アイ「・・・。」

アルタイル「ええっと、とにかく先を急いでるんで！」

2人は走ってその場を去った。

アルタイル「まったく、変なこときやがって・・・。」

アイ「・・・。」

2人はそのまま城へと向かった。

そしてついに城門のところまで来た。

アルタイル「今日はあの2人はいなかったな・・・ふう。」

アイ「さあ、早く行きましょう。」

アルタイル「ああ。」

2人は城門前の橋を渡り、出欠チェックの所まで行く。

シド「おお、きたか・・・！！？おい、なんであんた王女と一緒にいる！？」

アルタイル「いやあ、実は昨日突然「住ませてくれ」って言われたからさ仕方なく・・・。」

アイ「アル、その言葉はどういう意味ですか？」

アルタイル「え、あ、いや、そういうわけじゃなくて・・・。」

シド「はいはい、とにかく武器を見せろ。」

シドが話を止めてくれたのでアルタイルはほっと一息。

アルタイルは自分のエクスカリバーIIを見せ、アイは自分のルビーウェポンを見せる。

シド「へえ・・・ルビーウェポン・・・伝説は実在したって話か。アルタイル「これ以外にもまだ3つもあるんだってさ。」

シド「・・・まじかよ。でも大剣の技術はクラウドに負けると思うよ。」

アイはそれに対して疑問を投げかける。

アイ「それはどういことですか？」

シド「クラウドも大剣使い。王女様みたいな伝説の剣じゃないが、技術力と瞬発力はすごいぞ？」

アイ「そのクラウドと名乗る者と一度対峙したいものです。」

シド「無理無理。あいつは特別階級兵だから毎日忙しくてそんな暇ないよ。」

アイ「そうですか・・・。」

そこにアルタイルが間に入って、一言切り出す。

アルタイル「チェックしたんだからさ、早く通らしてくれよ。」

シド「あ、そうだった。では入城を許可する。」

そう言われると、2人一緒に城の中へとはいって行った。

そしてそれから4時間後、城の中で大きなアナウンスが入る・・・。

アルタイル「さて、閉ざされた島の資料の編集をしなきゃ・・・。」

『緊急アナウンスが入りました。』

アルタイル「ん？」

『上級大佐から曹長までの方は至急、緊急用会議室へとお集まりください。』

アルタイル「俺も入るのか。んじゃ行かなくちゃな・・・。」

アルタイルは急いで会議室へと向かう。

—緊急用会議室—

人がとても混んでいて、押しつぶされそうな勢いだった。

ザワザワ・・・

アルタイル「ちょ、やめろって、痛いって、ぎよわ、ぎゃあーっ！」
ドカドカドカツ

アルタイルは転んで、そのまま上からどんどん踏まれる。
なんとか難を逃れたアルタイルだが、服装はすでにボロボロであった。

アルタイル「うおお・・・痛かったあ・・・。」

アルタイルはそう言って、ゆっくりと自分の席に座る。

そろそろ緊急会議が始まるころ。

時間が迫ると、目の前に「4元帥」と呼ばれる4人の元帥が並び始めた。

ハンスⅡアスペルガー。40歳。4元帥の中では最年少。

レオⅡカナー。66歳。「無数兵器所持者」の異名を持つ。

イディオ||サヴァン。49歳。目の見えない元帥。4元帥の中の「大元帥」の称号を持つ。

ガラフ||ドゥ。60歳。記憶のない元帥。「ジョブマスター」の異名を持つ。

そのメンバーを目の前にして、アルタイルの体が固まる。

アルタイル「……………」

そして、ついに緊急会議が始まる。

アスペルガー「おはようございます。」
皆「おはようございます。」

ここでみんなが一礼する。

アスペルガー「ええ、どうしてここに集まってもらったかというところ……話すと長くなります。」
アルタイル「……………何の話なんだろう……………」

アルタイルは話に耳を傾ける。

カナー「それに関しては私が説明します。」
カナー「風のクリスタルが存在する「グラン島」が占拠された。」

それを発言した瞬間に周りが大いにざわめき始めた。

「それはどういことですか！」

「突然のことで意味がよくわかりません！」

「誰が占拠したのですか！」

そのような声が飛び交う中、説明を再び開始する。

カナー「ええ、島を占拠したのは「Xew^{エクセウス}s」という名の特殊部隊だ。」

それを聞いた瞬間、アルタイルは何かを思い出す。

アルタイル「Xew^{エクセウス}s・・・！？まさか・・・！？」

カナー「動機は現在不明であり、調査中である。」

アルタイル「・・・。」

アルタイルは腕を組んで黙る。

カナー「ええ、現在は言っている情報によると、グラン島の核廃棄処理所を占拠されたとのことだ。」

アルタイル「・・・。」

カナー「なお、Xew^{エクセウス}s側からの連絡は一切なく、これ以上の情報を得るのは不可能と判断した。」

カナー「そこで我々は「調査団」を派遣することを決定した。」

アルタイル「調査団・・・？」

カナー「調査団メンバーは、アンジール・クラウド・ザックス・リオ・シド・バイエルの6人だ。」

アルタイル「シドも入ってるのかよ・・・。」

その後も会議は続き、1時間後・・・

カナー「以上をもちまして、グラン島事件に関する緊急会議を終了する。では、解散！」

300人ほどいた会議室からゆっくりと人が消えていった。

アルタイルもその人ごみの中に入り、外へと出ていく。

アルタイル「なんでXewsがそんなことをしたんだ……。一体何が……。」

シド「自分もそう思ったって。」

アルタイル「シド!？」

横を振り向くと、壁に寄りかかって待っていたシドがいた。

アルタイル「さっきの会議でシドがメンバーの中に……。」

シド「いいじゃないか、別に。まずは簡単に経緯を。」

アルタイルは自分の頭をかきむしりながらシドに耳を向ける。

シド「会議前に自分たちでいろいろと話し合った。」

アルタイル「へえ。」

シド「2時間ほど議論した結果その6人で行くことになった。」

アルタイル「……??.んで、その中にシドが?」

シド「ああ。」

アルタイル「なんでだよ。」

シド「「空長」って呼ばれてる自分が出動しないでどうする?」

アルタイル「……飛空挺で行くのか。」

シド「もちろん。」

アルタイルは呆れて、どこかに行こうとする。

シド「待ってくれ。」

アルタイル「ん？」

シド「Xewsって・・・あの伝説の戦士が設立したあのXews
でいいんだよな？」

アルタイル「おそらく・・・。」

シド「なんで・・・突然・・・。」

アルタイル「変わったよ、あの団体も・・・。」

シド「あのXewsは・・・伝説の・・・戦士・・・。」

アルタイル「・・・『エクスレジェンド』が建てた団体のはずだ・
・。」

2人は声を震わせながら確認をしあう。

シド「でも19年前のあの事件で亡くなった後に別の人が受け継い
だはず・・・。」

アルタイル「・・・。」

2人はどんどん深入りしていく。

が、シドはその話を終わらせ、別の話へと転換させる。

シド「・・・さてと、そろそろ行く準備をしてくる。」

アルタイル「準備・・・？」

シド「飛空挺の動力調整さ。」

アルタイル「早いな。今日から行くのか？」

シド「ああ。今日の17..30にここから出る。」

アルタイル「俺もそっちに行けたらいいのにな。」

シド「あんたは無理無理。即死だって。」

アルタイル「即死って・・・。」

シド「そう気にすんなって。」

そういうと、シドはアルタイルの目の前でまっすぐに立つ。

アルタイル「どうしたんだ？姿勢をピシッとしちゃって・・・」

シド「・・・もし何かあったときは・・・城、頼んだぞ。」

アルタイル「あ、ああ・・・。」

そういうと、シドはどこかへ行ってしまった。

そしてその日の17時30分・・・

ゴゴゴゴゴゴ・・・

飛空艇は6人を乗せ、グラン島へと飛んで行った・・・。

アルタイルはその近くにある飛行場のフェンスにしがみついて、飛んでいく姿を眺めていた。

その日の夕日は、いつもよりきれいに見えた。

アルタイル「・・・あつという間にいつてしまったなあ・・・。」

アイ「そうですね。」

アルタイル「うお!?! いつのまに!?!」

その隣には、いつのまにかアイが・・・

アイ「私が来てはダメだったのですか？」

アルタイル「いや、べつに悪くはないけど・・・ああびっくりした。」

アイ「びっくりとは失礼ですよ。」

アルタイル「すまないすまない。でもいきなりだったからさ。」

アイ「・・・それは失礼しました。」

アルタイル「え、いや、謝ることはないさ。」

アイ「・・・。」

アルタイル「はぁ・・・。」

アルタイルは再び空を眺め、ゆっくりと空の彼方に消えていく飛空艇を眺める。

アイも空を見上げ、アルタイルと一緒に飛空艇を見つめる。

アルタイル「・・・無事に成功することを・・・願いたい・・・。」

アイ「私もそう祈ります・・・。」

アルタイルはフェンスの前で目を瞑り、無事帰還することを祈る。

アルタイル「・・・さて、そろそろ仕事に戻らないとな。」

アイ「もうそんな時間ですか。」

アルタイル「マテリアの供給まだ済ませてないから先に行くよ。」

アイ「わかりました。」

そういうと、アルタイルは走って城へと向かう。

アルタイル「シド・・・！」

時間はあっという間に過ぎ、終了の鐘が鳴り響く。

「ありがとうございましたー！」

城の中から、戦士の大きな終わりのあいさつが響いた。

アルタイル「あー、疲れたなー。」

ウェッジ「アル曹長ー！！」

アルタイル「ギクッ」

アルタイルの後ろから走ってきたのは、いつもの「ビッグス」「ウェッジ」の2人であった。

ウェッジ「今日1日どうでしたかー！？」

アルタイル「かなり驚いた1日だった。」

ウェッジ「驚いたって、グラン島のことですか？」

アルタイル「突然すぎて頭が真っ白になった。なんのことか・・・」
ビッグス「このような話をする暇はないはず。さあ、早く行こう。」

アルタイル「そうだったな。んじゃ、行こうか。」

そういうと3人はチェックを済ませて城から出た。
その後も3人は延々と話をする。

アルタイル（ああ、さっさと終わってくれよ・・・）
ウェッジ「で、その人が・・・」

ビッグス「はぁ・・・」

そしてそのまま十何分か経ち、分岐点で2人と別れた。
後は家に帰るだけだ。

アルタイルはその後家に着いた。
明かりが照っている。

アイでもいるのだろう。

そう思ったアルタイルはカギを解除し、ドアを開ける。

アルタイル「ただいまー。」

アイ「おかえりなさいませ。」

アルタイル「おお、待っていてくれたのかー。」

アイ「当たり前のことです。」

アルタイル「それもそうだな。」

アルタイルはリビングへと向かい、上から激しくソファへ座る。

アルタイル「はぁ・・・まだこの生活に慣れないなぁ・・・」

アイ「そのうち慣れますよ。」

アイは、自分の大剣を持って部屋に入ってきた。
その大剣を壁に立てかける。

アルタイル「慣れればいいんだけどなぁ・・・はぁ・・・」

そしてアルタイルたちの「今日」は終わった。

Z. E. 208 12/5 01..57

第4話に続く

第4話：自身の闇

Z. E. 208 12/15

アルタイルは今どこにいる？

夢の中だ。

アルタイルは今何をしている？

「絶望の丘」で跪いている。

アルタイルは今どこにいる？

自分の心の中だ。

アルタイルは今何をしている？

自分の闇と対話している。

アルタイルは今どこにいる？

生死の淵にいる。

アルタイルは今何をしている？

一生懸命踏ん張っている。

アルタイルは今どこにいる？

「闇」という名のブラックホールのすぐそばにいる。

アルタイルは今何をしている？

自分自身の闇に、飲まれようとしている・・・

ゴゴゴゴゴ・・・

アルタイル「お前は・・・誰だ・・・!!」

永遠の闇「私は、お前の闇だ。」

アルタイル「お前が何者なのかを知りたい。お前は誰だ・・・!」

永遠の闇「お前が生み出した存在である。それ以上のものはない。」
アルタイル「ぐ・・・。」

アルタイルの体はどんどん重くなる。

アルタイルは、突然目の前に現れた「謎の存在」を、ただ見るだけしかできなかった。

永遠の闇「ここは私の領域だ。長居すると、自らを潰す可能性がある。」

アルタイル「だったら限られた時間でいろいろと聞いてやるよ・・・」

「
アルタイル「もう一度聞く。あんたは誰だ・・・」

永遠の闇「正体・・・か。後々に困るだろうからここで答えよう。

私は永遠の闇だ。」

アルタイル「永遠の・・・闇・・・?」

聞き覚えのない名前を聞き、アルタイルは首をかしげる。

その直後に、永遠の闇と名乗る者が突然「自分の過去の話」を話します。

永遠の闇「私はかつて、一人の男の心に付け込んだことがある。」
永遠の闇「男の名はクジャ。彼の運命と過去に興味があり、彼が狂乱する時を待った。」

アルタイル「あんた、突然何の話を・・・」

永遠の闇「彼は、ある人物から自らの運命を告げられ、ついに狂いだした。」

永遠の闇はアルタイルを無視し、説明を続ける。

永遠の闇「彼はガイアを道連れにしようと、クリスタルの破壊を目論んだ。」

永遠の闇「あの時の私の目的は、すべての生命を無に還すことであつた。」

永遠の闇「クジャの行動は過激化していき、私の目的は果たされようとしていた。その時に邪魔が入った。」

アルタイル「一体何の話・・・」

永遠の闇「彼は盗賊と名乗り、クジャを、さらにはトランスのクジヤまでをも止めた。」

永遠の闇「私はその者たちを止めるべく、クジャから絶望の力を全て吸ってその者たちの精神に介入した。」

永遠の闇「だがその者たちの「生きる」という意思があまりにも強大であったがために敗北をしてしまった・・・。」

アルタイル「・・・。」

アルタイルはその話を聞き、ある1人の男の名前を言う。

アルタイル「そいつ・・・まさか「ジタン」じゃないよな・・・？」

永遠の闇「なぜその名を記憶している？」

アルタイル「かなり前なんだけどそいつがこの世界に「境界放浪者」としてきてな・・・。」

永遠の闇「・・・お前はあの時13歳だったか・・・記憶しているのも当然か。」

アルタイル「どういうことだ？」

永遠の闇「私は、その時にお前の心に介入したのだ。」
アルタイル「・・・!？」

アルタイルは、突然告げられた事実戸惑いを見せる。
頭の中がどうやら整理できないようだ。

永遠の闇「私はその少し前、ほとんど力が残っていない状態であった。」

永遠の闇「私は必死でジタンの中にとどまり続け、クリスタルへ還ることを拒んだ。」

アルタイル「お前、もしかして・・・」

永遠の闇「そう。私は、魂のみの非生命体『ソウルド』である。」
アルタイル「だから俺の心に介入できるのか・・・!」

永遠の闇「私はすでに死んだ身。『リセプティ』など存在しない。」

アルタイルが思っていた疑問の一部がスッキリする。

リセプティ・・・「体」を意味する。魂の器。死後に抜け殻となるのが一般的。

ソウルド・・・「魂」を意味する。命そのもの。死後に結晶核へ還るのが一般的。

結晶核・・・世界を支えるための中心核。ここから結晶ができ、地上へ出たものがクリスタルとなる。

生物・・・「体」と「魂」がある者。死後にリセプティとソウルドに分離するのが一般的。

アルタイル「お前、俺を乗っ取る気なのか・・・!？」

永遠の闇「そんなことはさすがにしない。だが、乗っ取るとすれば・・・死後だ。」

アルタイル「・・・!？」

永遠の闇「では話の続きをしよう。」

アルタイル「・・・。」

永遠の闇「私は、そんな状況だった。だが異常事態が起こった。ジタンが別世界へ飛ばされたのだ。」

永遠の闇「私も連れられ、そして9年前ここに辿り着いたのだ。」

永遠の闇「ジタンは絶望の感情を持たず、私は非常に深刻な傷を負い、これ以上留まるのは無理と考えた。」

永遠の闇「そこにお前が現れた。」

永遠の闇はそう言い、アルタイルに指をさす。

アルタイルの目がどんどん鋭くなる。

アルタイル「そんなときからあんた・・・」

永遠の闇「お前の記憶から、過去の事等を調べた。非常に興味深く思った。」

アルタイル「俺の記憶を・・・？」

永遠の闇「お前自身は知ってるようだが、「アドベントチルドレン計画」で生まれた子供らしいね。」

アルタイル「そのことには触れるな・・・!！」

アルタイルの心が黒一色に染まる。

永遠の闇「『あの伝説を再臨させる』のが目的か。人という生物もくだらないことを考える。」

アルタイル「お前、それ以上言うと・・・!」

永遠の闇「お前は今何もできないのに、それを言うのか？」
アルタイル「・・・。」

アルタイルの体には、相当な「重力の圧」がかかっていた。
すでに限界寸前であった。

アルタイル「・・・。」

永遠の闇「もちろんお前が数々の試練を超えて今ここにいるのも調査済みだ。」

アルタイル「優秀者選抜のことか・・・。」

永遠の闇「ガイアレスⅡシリウンの遺伝子を受け継ぐ480人の子供達に試験をさせた。」

アルタイル「・・・。」

ガイアレス…かつて「エクスレジェンド」と呼ばれた伝説の戦士。
19年前のある事件で亡くなった。

永遠の闇「数々の試練の中、何十人も惨殺され、最終的に試練を乗り越ったのは2人だけ。」

アルタイル「もうそれ以上・・・。」

永遠の闇「その中の1人がアルタイル、お前なのだろう？」

アルタイル「しゃべるな・・・！」

永遠の闇「その時お前はわずか5歳・・・。大変苦労をしただろう。」

アルタイル「あんたは黙れ・・・！」

アルタイルの心の中でどんどん広がっていく絶望の暗雲。

永遠の闇「まあいい。過去の話も途中になってしまったが、ここでやめておこう。」

アルタイル「解放して……くれるんだな……」

永遠の闇「それは無理だ。」

アルタイル「どうしてだ……！」

永遠の闇「……。」

その瞬間、アルタイルの足元が突然崩れた！

アルタイルはそのまま暗闇の中へ……

永遠の闇「……。」

永遠の闇はアルタイルが落ちていく様子を見終え、静かに消える。

ここはどこだ？

真っ暗で何も見えない……

ここはどこだ？

辺り一面黒一色……

ここはどこだ？

自分の心の中なのか？

ここはどこだ？

そこは無の空間。

ここはどこだ？

ただ無だけが広がる世界。

ここはどこだ？

闇の正体・・・なのか？

ここはどこだ？

もうどこでもいい・・・

ここはどこだ？

俺は・・・俺は・・・！！！！

闇が・・・お前を侵食する・・・

・・・!!?
?

アイ「起きてください・・・起きてください・・・アル・・・！」

アルタイル「う・・・んん・・・。」

アルタイルは、無事に「現実の世界」に帰還することができたようだ。

先ほどまで闇の中にいたアルタイルは「光」を久しく感じた。

その「光」がアルタイルの目に降り注ぎ、まだ慣れないアルタイルは目を瞑ったまま横を向く。

その視界に突然アイの顔が入った。

アルタイルの眠気は一気に吹き飛び、壁にしがみつく。

アルタイル「うおお!？」

アイ「アル、失礼ですよ。」

アルタイル「ああ、ごめん・・・いや、起きて横向いたら・・・いやあびつくりした・・・。」

アイは、心配した顔でアルタイルを見ていた。

アルタイル「・・・?ええっと・・・どうしたんだ?」

アイ「アルが先ほど声をあげて苦しんでいたので、心配してアルの部屋に来ました。」

アルタイル「そんなに声が大きかったのか・・・?」

アイ「何か悪い夢を見られていたのですか?」

アルタイル「いや、なにもみていない・・・。」

アルタイル（『永遠の闇』が夢の中で登場したとか言えるはずがない・・・。）

そうとうとアルタイルはベッドからゆっくりと降り、クローゼットの扉を開く。

アイ「では、私も出勤の準備をしますので。」

アイも仕事の準備をしに部屋から出る。

そしてさっそく2人は家を出て、城へと向かう。

キャスト「ブキヲミセロ。」

アイ「アル、こちらの機械は何ですか？」

アルタイル「これはキャスト。城が作り出した高機能機械人形さ。」

アイ「へえ、そうなのですか。」

キャスト「ブキヲミセロ。」

アルタイル「これが城でいつも働いているのを見ていないのか？」

2人とも完全無視。

アイ「言われてみれば見たことがあるような気がします。」

アルタイル「気がするじゃ駄目だって……。」

キャスト「イイカゲンニブキヲミセナサイ!!」

アルタイル「あ、ごめん。」

2人はそれぞれ武器を見せる。

キャスト「エクスカリバーII……」

キャスト「アルテマウェポン……ルビーウェポン……」

いくつもある目を光らせて確認するキャスト。

キャスト「・・・ヨロシイ。ニュージヨウヲキヨカスル。」

アルタイル「んじゃアイ、行くぞ。」

アイ「はい。」

アルタイルは城門を通り、城の前の長い道を走る。

とその時、目の前が突然真っ白になる。

アルタイル「っ・・・！！？」

アルタイルは突然のことで体が固まる。

そして、そこに現われたのは・・・虹色の大きな玉・・・？

アルタイル「あれは・・・なんだ・・・！？」

オズマ「・・・自分はオズマ。」

アルタイル「え！？しゃべれるのか！？」

オズマ「・・・。」

アルタイル「・・・ええっと・・・。・・・・？」

アルタイルは、いつまでたってもうごかないオズマを前におどおどする。

そして・・・

オズマ「・・・そろそろ・・・始まるよ・・・。」
アルタイル「え・・・!？」

そして、目の前が白の世界から現実の世界へゆっくりと、ゆっくりと変化する・・・。

Z. E. 208 12/15 5:24

第5話に続く

第4話：自身の闇（後書き）

どうも、無限物質です。

最近生活的に忙しい時分ですけど、何とか合間を縫って執筆しています。

さて、今回あの「ペプシ神」と「シャボン玉」が登場しました（笑）

永遠の闇は、決選直後に残す言葉から推測してキャラを作り上げました。

個人的にペプシ神は好きなので、これからもちよくちよく出すと思います。

オズマは、完全に個人的解釈でにキャラを作りました。

オズマの個人的イメージは「静かなる謎の最終兵器」です・・・。

そんなこんなで出た2体ですけど、今後もそれなりのキャラを出しまくる予定なのでよろしくです。

第5話：指名と使命

—真月機構—

ここは「第803世界」と呼ばれる次元。

その次元には、全ての次元の均衡維持と管理をしている『真月機構』がある。

その本部に在籍する者は、わずか4人しかない・・・

そのうちの1人が、大きな窓ガラスの前に立って夜空を見ていた。

81

クリエイター「闇に染まった夜の世界を、月の光が明るく包み込む・・・神秘的だ。」

クリエイター。彼はあらゆる次元をつくった「創造主」であり、「絶対主義者」でもある。

そのクリエイターの後ろで、浮遊するものがクリエイターに近づく。

オズマ「忠告したよ・・・。」

クリエイター「ついに・・・はじまった・・・か・・・。」

クリエイターは手を伸ばし、自らの念で夜空の星を動かす。

オズマ「・・・。」

クリエイター「・・・戻れ。」

オズマ「・・・。」

オズマはクリエイターのもとから静かに去った。

クリエイターはその後星を動かし、幾つもの星を融合させた。

その途中で、クリエイターは1つの「過去の記憶」を頭に巡らす。

クリエイター「く・・・あの時・・・なぜ・・・グオ・・・!!」

クリエイターの中の闇が心を侵食しようとした時に、タイミング良くオズマが現れる。

オズマ「クリエイター。」

クリエイター「・・・!!」

クリエイターは我に返り、オズマのほうへと振り向く。

クリエイター「何の話だ？」

オズマ「・・・自分の闇の抑制、まだできないの？」

クリエイター「闇・・・か・・・。」

クリエイターは自分の胸に手をあて、強く握りしめる。

クリエイター「・・・オズマ。」

オズマ「なに？」

クリエイター「我の中の闇の力が強くなってきた・・・。今後

抑制は・・・。」

オズマ「自分がカバーをする。それでいいね？」
クリエイター「・・・。」

オズマは静かに去った。

クリエイター「オズマ・・・。我は・・・。いつたい・・・。
。」

???「フアフア・・・。」
クリエイター「・・・。!?」

封印されてもなお活動続ける暗黒魔導師――

死のない旋律を駆け巡る今

死を超えし者は封印を解かれる時を待つ

自らが求めた「虚無」の力

すべてを無にするつもりで呼び覚ましたあの力

その力が4人の勇者によって封じられ

過去の記憶として過ぎ去っていった

あれから500年の時がたち

世界は完全なる復興を遂げた

だが、死のない旋律にクレシェンドが加えられ

宇宙の法則が今

乱れ始める

そのころ・・・

アルタイル「い、いまのは・・・？」

アルタイルは、道の真ん中で呆然と立っていた。

『オズマ「・・・始まるよ・・・」』

アルタイル「始まる・・・？何が始まるって言うんだ・・・」

そこから少し先にいたアイは後ろを振り返る。

アイ「どうされたのですか？」

アルタイル「あ、いや・・・うん・・・。」

あの言葉が何を意味するのか――
この時の彼にはわからなかった。

アルタイル「・・・・・・・・。」

アルタイルは疑問を抱きながらアイへと向かって走った。

―城内―

2人は城内に入り、大きな階段の前で一度立ち止まる。

アイ「そういえば今日は、調査団からの報告が来る日のはずです。」
アルタイル「報告は今日なのか？：言われてみりゃ、確かに10日ぐらいたったな・・・。」

アイ「いい情報を、無事得ることができたんでしょうかね・・・？」
アルタイル「そうだいいいな。」

2人は調査団に関する話で、少し盛り上がっていた。

アルタイル「ああ、そう考えると結構楽しみな!!」

アイ「楽しみとか、そういう問題ではありません。」

アルタイル「あ、ごめん……。」

アイ「それで、その報告に関する集会が、たしか……」

アルタイル「14時20分にあるんだろ? 覚えますよ、と。」

アイ「その時間にあるようなので、忘れないでください。」

アルタイル「どうせアナウンスが入るから、忘れないって。な?」

アイ「……ですね。」

2人がしっかりと確認をしたところで、アイが一步下がる。

アイ「では、私はここで。」

アルタイル「今日もお互い仕事がんばろうな!」

アイ「はい!」

2人は別々の所へと向かい、今日の仕事が始まった。

それから6時間後――

Z. E. 208 12/15 11:41

それは、アルタイルが軍曹らを集めて話し合っていた時のことである。

アルタイル「………ということだ。」

某軍曹A「それには反対です。」

ビッグス「いや、俺は賛成です。」

某軍曹B「しかし、あの近くには火のクリスタルがあるのでしょ！
？破壊の危険性も……」

アルタイル「4元帥と32将が提案した案だ。まあ反対でも構わないが……」

某軍曹B「あのクリスタルは世界を支える、いわば「柱」のようなものです！もしそんな……」

ビッグス「その期間だけ一時的に火のクリスタルを移動すれば問題ないはずだ。」

某軍曹A「だが、移動するとなったら莫大な費用がかかるぞ！それにリスクがあまりにも……」

アルタイル「ううむ……」

アルタイルが腕を組んで悩んでいたところに、突然アナウンスが入った。

アルタイル「ん？」

『アルタイル曹長、ギルガメッシュ親衛隊長、アイ伍長は今すぐ第2元帥室へお集まりください。』

アルタイル「元帥室……！？急に何の話だよ……！」

ビッグス「曹長、話し合いは……？」

アルタイル「ビッグスが代理で続行してくれ。」

ビッグス「かしこまりました。」

そういうとアルタイルは部屋から出て行き、急いで第2元帥室へと

向かう。

―第2元帥室前―

アイ「……。」

ギルガメツシュ「まったく遅いな……。アルはまだか……。」

しばらくして、アルタイルが走ってやってきた。

アルタイル「はぁ……。はぁ……。」

ギルガメツシュ「遅かったじゃねえか！」

アルタイル「遅れてないからいいじゃないか！」

ギルガメツシュ「ぐ……。まあよしとする。」

3人がそろってから5分ほど経ったところ……

ギルガメツシュ「……。」

アルタイル「……。」

アイ「……。」

アルタイル（遅いなぁ……）

ギルガメツシュ「……まだなのか？」

アルタイル「そうっばい。」

ギルガメツシュ「俺様をどれだけ待たせれば……。」

アルタイル「そうやって威張れるのも今のうちだろうな。」

そう話していると、元帥室のドアが開いた。

ギィィ・・・

アスペルガー「おお、君たちよく来てくれた。」

開いた扉の先には、4元帥の1人『ハンスⅡアスペルガー』がいた。

アルタイル「元帥殿、今回は一体何の御用時で・・・？」

アスペルガー「詳細は部屋で話すから、まずは部屋に아가ってください。」

アルタイル「お邪魔します。」

3人は体を震わせ、それぞれの席にゆっくりと座る。

ギルガメッシュ「ああ、緊張するぜ・・・。」

アイ「・・・。」

3人は、窓の向こうに広がる街の風景を見ながら、アスペルガーが来るのを待つ。

そして、アスペルガーが飲み物を持ってゆっくりとやってきた。

アスペルガー「さあさあ、飲み物は遠慮せず飲んでいいぞ。」

アイ「ありがとうございます。」

3人の前にコーヒーがそれぞれ置かれる。

アスペルガーは窓の前に立ち、外を眺める。

アスペルガー「ふう・・・今日のムーアもいい街だ。」

アルタイル「元帥殿、今回僕たちを呼び出しましたよね？一体なぜ

僕たちを？」

その言葉を聞いたアスペルガーは一度うつむき、ゆっくりと顔をあげながらアルタイルに顔を向ける。

アスペルガー「いろいろと深刻な問題が起きてね……。」

そんな中、アルタイルの横でギルガメッシュが堂々と寝ていた。

ギルガメッシュ「ガアア……。」

アルタイル「こ、こいつ……。」

アイ（放置しておきましょうよ。）

アルタイル（……そうしよう。）

アイ「それで元帥様、そのわけとは一体何なのですか？」

アイがそう聞くと、アスペルガーは眉をひそめながらソファに座る。

アスペルガー「まずは、ここに至るまでの経緯を話さなければなら
ないだろう。」

アイ「その経緯とは……？」

アスペルガー「最初に、調査団について話そう。」

アルタイル「調査団……？シド達のほうか？」

アスペルガー「ああ。」

アスペルガーはため息をつき、再び話を始める。

アスペルガー「この11日間にいろいろと情報が入ってきた。」

アイ「その情報とはどのようなものでございますか？」

アスペルガー「たとえば……核廃棄処理所がまるで『要塞』のよ

うになっていたこと。」

アルタイル「・・・!？」

2人の目が大きく見開く。

アスペルガー「その核廃棄処理所の中心に『水のクリスタル』があったこと。」

アイ「・・・！」

2人は驚きながらもうなずき続け、話を静かに聞く。

アスペルガー「一番驚いたのが・・・そこに最終兵器の『オメガ』があったことだ。」

アルタイル「・・・!？オメガ・・・って・・・!!！」

アルタイルは息が詰まる。

あの兵器がなぜ・・・

その疑問を、頭の中で何度も復唱する。

アスペルガー「自分も聞いた時は驚いた。まさかそんなはずは、と思っていたが・・・」

アルタイル「なぜオメガがそんなところにあるのですか!! あれは封印されているのでは・・・」

アスペルガー「だから今、一体何が起こったのか調べている。」

アスペルガー「さらに、その周辺には『プロトタイプ』とやらがウロウロしている。」

アルタイルとアイは、驚きすぎて何も言えない状態。

アルタイル「オメガは1500年前に神竜とともにやってきた最強の怪物……」

アイ「その当時存在した勇者達でさえ歯が立たず、死闘の末2体を封印した。」

アルタイル（他次元の人なのによく知ってたな……）

アスペルガー「そのオメガのコピー」「プロトタイプ」が流出され始めたのは35年前だ。」

元帥と2人は、オメガとプロトタイプの話へと入っていく。

アルタイル「でもなんでコピーする必要がある？」

アスペルガー「当時軍事力の乏しかった小ムーアには、これといった兵器がなかった。」

アルタイル「それでオメガの封印を解いた……ということ？」

アスペルガー「オメガの暴走をどう防いだかは知らないが、その時に力を抽出したのだろう。」

アルタイル「オメガの劣化コピーを大量生産、か。」

アスペルガー「だが19年前の事件でプロトタイプの生産は中止された。」

アスペルガー「そのはずなのになぜ……」

アスペルガーの頭の抱えぶりを目の前にして、アルタイルも同じポーズをする。

アスペルガー「Xews……一体何を……？」

アスペルガー「……では、前置きはここまでにして、今から本題に入ろう。」

アルタイル「え、いまからが……？」

アスペルガー「今まで話したのは単なる調査結果だろうか？」
アルタイル「……。」

2人は引き続き話を聞くことに……。

アスペルガー「実は、3日ほど前から調査団との連絡が取れない状態にいる。」

アイ「連絡が……!？」

アスペルガー「おそらく敵から襲撃を受けたものと思われる……。」

アルタイル「んなばかな……。」

突然のことに2人は啞然とする。

アスペルガー「これが、向こうから送られてきた最後の写真だ。」

その写真には、左右に兵士らしきものがいて、真ん中にザックスらが跪いていた。

そして、その写真の奥にいたのは……

アルタイル「な……!？」

アスペルガー「奥にいる者が今回の事件の首謀者。名前は不明だ。」

アスペルガー「それにしても、この者の顔が君に似ているのは……気のせいかな？」

アルタイルはその言葉を無視し、口をふさぐ。

アスペルガー「……何か知っているのか……?」

アルタイル「ええっと……知ってはいるけど……言いたくは……。」

アスペルガー「なら・・・別にいい・・・。」

そういうと、アスペルガーがゆっくりと立つ。

アスペルガー「そこでだ。緊急の調査団として君たち3人を指名したいと思っているが・・・。」

アルタイル「え、我々を？」

アイ「どうしてなのですか？」

アスペルガー「今城内にいる者で、時間があり、かつ能のある者が、『君たち3人』だったのだ。」

アルタイル（理由が何と言うか、かんと言うか・・・）

アスペルガーはアルタイルの顔を見る。

アスペルガー「どうだ、引き受けてくれないか？」

アルタイル「・・・わかりました、やってみます。」

アスペルガー「・・・感謝する。」

そういうとアスペルガーは部屋の出口前まで歩き、その場で止まる。

アスペルガー「・・・使命の内容を言おう。」

アルタイル「・・・？」

アスペルガー「今回派遣した調査団のメンバーの無事を確認し、生者はただちに救出せよ。」

アルタイル「・・・わかりました。」

アスペルガーはドアを開ける。

アスペルガー「それと君たち3人の中で、だれも飛空艇を運転できないだろう？」

アルタイル「あ、はい・・・。」

アスペルガー「そんな君たちのために今回『大銀竜』を召喚した。外を見てみよ。」

アルタイル「え・・・!？」

アルタイルとアイは急いで大きな窓ガラスの前に立つ。

そこには、銀色の翼をもつ大きな召喚獣が待機していた――

第6話に続く

第5話：指名と使命（後書き）

どうも、お久しぶりです。

無限物質です。

学業のほうでいろいろと忙しかったので遅れました・・・。

というわけで今話について少しお話を。

今回出てきた「クリエイター」という名前のキャラを知っていますでしょうか？

このキャラは、某FF作品のラスボスです。

おそらく知名度の低いラスボスだと思っています。
詳細を知りたい方は自己調査してください。

では今後ともよろしくお願いします！！

特別短編：同じ遺伝子を持つ者

??? 1 「なら、俺と同じ遺伝子をもつ者がムーアにいると？」

??? 2 「どうやらそのようだ・・・」

コンピュータに囲まれた密室で、謎の人物たちが会話をしていた。そこには1人の若者が椅子に座っており、1人の年老いた者がその後ろで立っていた。

??? 1 「アルタイル・・・8年ぶりの再会か・・・。」

謎の若者はコンピュータの画面に映ってる「アルタイルの写真」を見ながら言う。

??? 2 「そこにはセフィロスやジェネシスもいるそうだ・・・。」

??? 1 「そいつらって確かジェノバプロジェクトで生まれたんでしょ？」

??? 2 「詳しい話はわからないが・・・。」

若者は椅子から立ち上がり、拳を画面にたたきつける。

??? 1 「なんかイラつくから資料請求しよっか。こっちは人質いるんだし。」

??? 2 「人質の一部で始末した奴もいるが。」

??? 1 「ええっと、クラウドだっけ？ そいつを今から牢獄から出せ。」

??? 2 「プレアデス、何をするつもりだ？」

年老いた者は、その若者に向かって「プレアデス」と呼ぶ。

プレアデス 「そいつを盾にするんだよ。あとここの管理人も牢獄から出せ。」

??? 2 「・・・では。」

年老いた者はその場から立ち去る。

プレアデス 「ちゃんとやってくれよ、バイエル・・・。」

若者は、先程の年老いた者の名を呼ぶ。

プレアデス 「さて・・・次のターゲットはセフィロスだ・・・。」

そういうと、コンピュータの大画面に「セフィロスの写真」を出す。

プレアデス 「現在『英雄』と言われている戦士、か・・・。」

プレアデス「むう・・・英雄が僕達に従うとは思えないね。それにさ・・・」

???「ふんぐ・・・」

プレアデス「死を超えし者が苦しんでいる。早くこの封印を解かねば・・・」

プレアデスは光るキーボードに手をおき、セフィロスの経歴を画面に出す。

プレアデス「ここに載ってる経歴はどれも大体のヤツしかないなあ・・・」

プレアデス「今回の計画にはどうしても必要なだけだなー・・・」

その場からプレアデスは立ち上がり、今度は別のコンピュータをあたる。

プレアデス「封印解除後にセフィロスを・・・ってやりたいが、まずはこちらか。」

プレアデス「でも、まだ封印は解けないだろうから、せめて封力を弱めて・・・」

???「ふんぐお・・・」

そういうと、プレアデスは「某クリスタル」の中の力を吸収するコマンドを選ぶ。

プレアデス「この力で『魔導アーマー』を・・・！これぞ一石二鳥だな。」

プレアデス「そしてEnterと・・・！」

クリスタルから吸われた力が『魔導アーマー』へと流れていく。しばらくして、すべての魔導アーマーが満タンとなった。

プレアデス「さてと、準備ができたところで早速始めるか、と。」
上級戦闘員「プレアデス様！アルタイル一行がついに城から出発しました！」

プレアデス「ついにこの時が来たか・・・。」

小さな灯火

鏡のかげら

百億の

とらわれた

天使の歌声

Xenogears
|

特別短編・完

第6話：海上小会議

＋a

ここは・・・

いたい・・・？

・・・わかった

あそこか・・・

あそこしかないな・・・

俺が前に眠った時に行った

あの場所・・・

絶望の丘

そう・・・

アルタイル「ぐ．．．ぐぐ．．．」

永遠の闇「また来たか、青年よ。」

そこには、あの『永遠の闇』が腕を組んで浮遊していた。
その永遠の闇はアルタイルを見下ろす形で身構えていた。

アルタイル「青年って・・・ぐあ・・・。」

永遠の闇「ようこそ、我が領域へ。」

アルタイル「今日だけで2回あんたを見るとは思わなかったよ・・・。」

アルタイルは跪く形で永遠の闇を見上げる。

永遠の闇「今回は、私が強制的にお前を眠らせた。」

アルタイル「なんでだよ？」

永遠の闇「それは後に言おう。その前に、自分の記憶の終わりを確認せよ。」

アルタイル「俺は確か銀竜に乗って、でそのあと飛び立って・・・。」

永遠の闇「おそらくそのあとから記憶がないはず。」

アルタイル「ああ・・・。」

アルタイルはひどい頭痛に襲われ、地面に手をつく。

それを見た永遠の闇は忠告を出す。

永遠の闇「今回も長居できないことを言っておこう。」

アルタイル「だったらさっさと話を片付けようじゃないか・・・！
！」

足がもつれそうになりながらもアルタイルは立ち上がり、永遠の闇を見る。

アルタイル「まず1つ……。なにしに来た？」

永遠の闇「お前の中に眠る『魔力』を覚醒しに来た。」

アルタイル「俺の中に？魔力？覚醒？……は？」

アルタイルはチンプンカンプンのようだ。

それに対して永遠の闇が言う。

永遠の闇「魔力は、生きる者がこの世に生を授かったときから、それらすべての者に例外なく存在している。その魔力を具現化させたものを「魔法」、その行為を「魔術」と呼ぶ。」

アルタイルはその説明でいろいろと思い出す。

アルタイル「そういえば俺、前に使ってたな……。しばらく使っていないけど。」

永遠の闇「そのせいでお前の中の魔力が沈んだ。だからそれを今から覚醒する。」

アルタイル「……意外に親切だな。」

永遠の闇「それはどうも。」

そういうと永遠の闇は翼を広げ、全身を青く光らせる。

永遠の闇「地面に手と膝をつけよ。」
アルタイル「ああ……。」

そういつとアルタイルはしゃがんで地につき、いつでもできる態勢をとる。

永遠の闇「……ではやろうか。」
アルタイル「ああ！」
永遠の闇「では……。」

その瞬間、目の前が真っ暗になった。
一体何が起こったのか……
それさえもわからず、記憶はそこで途絶える。

アル
タイル
「う
・
・
う
う
・
・
」

アルタイルはようやく目を覚ます。

アイ「ようやく目が覚めたようですね。」

ギルガメッシュ「気持ちよかったか？」

アルタイル「悪夢を見た……。」

まだ寝ぼけているアルタイルは、自分の手を見る。
そこには謎の「青の紋章」がついていた……。

アルタイル「……？」

アイ「どうしましたか？」

アルタイル「いや、なんでもない……。」

アルタイルは、ゆっくりと辺りを見回す。

そこはどこ見ても水平線の世界だった。

視界に入るものすべてが海。

感じるものは気持ちいい風。

アルタイルは驚きとともに新鮮な気持ちとなる。

アルタイル「俺達……ついに出発したんだな。」
ギルガメッシュ「お前今更何言ってるんだよ。」

アルタイル「い、今更って・・・」

アイ「アルが大銀竜に乗った途端に突然気絶しましたからね・・・」

アルタイル（そ、そうだったのか・・・。）

そんなアルタイルたちは、大銀竜の背中の上で確認等様々な事をやる。

アイ「さて、そろそろ任務の確認をしましょう。」

アルタイル「任務？」

アイ「アル。」

アルタイル「あ、はい。」

3人は円になる形で集まる。

アイ「任務の確認をする前に・・・ギルガメッシュ殿。」

ギルガメッシュ「なんだ？」

アイ「その大量の武器・・・どうにかならないのですか？」

アルタイルが振り向いた先には大量の武器の数・・・

剣に槍に斧に刀に薙刀に杖に鎌に

総重量はどれほどなのか、想像が全くつかない。

アルタイル「八本腕すぎえな・・・。」

ギルガメッシュ「武器フェチの俺様が武器もって何が悪い！」
アイ「重い。無駄。戦力外。」

ギルガメッシュ「即答だな、おい。」

ギルガメッシュは不快に思い、いっぱい武器を散りばめる。

ギルガメッシュ「こうなれば武器の素晴らしさってやつを教えてやるぜ！」

そうとうとギルガメッシュは、あの伝説の「エクスカリバー」を取り出す。

ギルガメッシュ「どうだ、この輝き！先端からこの筋を通る模様の美しさは・・・」

アイ（何の説明をしているのですか？）

アルタイル（あの八本腕は相当な武器マニアだからしょうがないよ。）

アイ（この世の中にもそういう人がいたのですね・・・）

アルタイル（俺は一応こういうのには慣れてるが・・・なんか複雑。）

ギルガメッシュ「おい、聞いているのかっー！」

アルタイル（あー、武器に埋もれればいいのに。）

そうとうと、アイはギルガメッシュの話を無視して確認に入る。

アイ「では、そろそろ任務の確認をしましょう。」
アルタイル「そうしよう。」

ギルガメツシュ「お前らっ！俺様がせっかく説明をして・・・」
アルタイル「興味ない。耳障り。黙れ。」

ギルガメツシュ「ぎにゃああっ！」

ギルガメツシュは精神的に石化した。

アルタイル「さて、はじめるか。」

アイ「そうしましょう。では、さっそく任務確認を・・・」

アイ「今回の任務は『襲われた調査団たちを救出すること』。」

アルタイル「シドとかクラウドとかホント大丈夫なのかな・・・。」

アイ「そしてもう1つ任務があります。」

アルタイル「え？」

アイがそういうと、一枚の「A4サイズの紙」を出す。

そこには小さくまとめられた文と大量の血が付いていた。

アルタイル「なんだ、その不気味な紙は？」

アイ「それを今から説明するのです。」

アルタイル「あ、はい。」

アイ「まず、この紙は『X e w s』から送られた要求書です。」

アルタイル「要求書？」

アイ「では読みます。」

アイはその紙を広げ、文の内容を読み始める。

『ごきげんよう。我々は、伝説の戦士「ガイアレスⅡシリウン」の遺伝子を受け継ぐ者を中心とする過激派武装組織「Xews」という。

我々は現在複数もの人質を管理している。人質の一部の者は激しい抵抗をしたため首を削ぎ落として処分をした。

さて、これより我々の要求する者を下記に記そう。

- ・ジェノバ・プロジェクトGに関する極秘資料
- ・ジェノバ・プロジェクトSに関する極秘資料
- ・オメガエネルギー事件に関する極秘資料

我々Xewsは、かつての英雄「ガイアレスⅡシリウン」を殺した者達へ報復する。

その第1段階として我々は「クリスタルの破壊」を行う。

上記の事を実行されたくなければ、先ほど記した3つの請求を呑むことだ。

以上』

アイ「・・・というわけです。」

アルタイル「めちゃくちゃすぎる要求だな。」

アルタイル（それにしても・・・なぜ19年前の事件の資料を今更・・・？）

アルタイルはこの要求に憤りを感じる。

とその時、頭に引っかかるものが現れる。

アルタイル「……ちよつとまで。冒頭の部分なんて書いてあった？」

アイ「冒頭ですか？ええっと……」

『ごきげんよう。我々は伝説の戦士ガイアレスⅡシリウンの遺伝子を継ぐ者……』

アルタイル「そこでストップ。」

アイ「……？」

アルタイル「ガイアレスの遺伝子を継ぐ者……。」

アルタイル（……生きていたのか……あいつ……！）

アルタイルは衝撃とともに心底から不安に感じるようになる。

アイ「すいませんけど『ガイアレス』とはどのような方ですか？」

アルタイル「数々の戦争で国を救い、単独で幾つも組織を壊滅させた伝説の戦士だ。」

アイ「すごいお方なのですね。」

アルタイル（受け継ぐ者……俺以外だとあいつしかいない……。）

そしてアルタイルは、ある1人の男の顔を思い浮かべる。

アルタイル（うん・・・あいつだ・・・『プレアデスⅡシリウン』・・・！！）

アルタイルは怒りの感情を持ち、その場から立ちあがる。

アイは、立ち上がったアルタイルを見上げる。

アイ「任務の確認は終わりました。」

アルタイル「まさか、極秘資料・・・」

アイ「もちろん持ってきてません。」

アルタイルはホッと一息。

アルタイル「で・・・次は作戦会議か？」

アイ「はい・・・といいたいのですが・・・。」

アイが横に指をさす。

アルタイルはその方向へ振り向く。

そこには、まだ石化していたギルガメッシュがいた。

アルタイル「・・・・・・・・続けよう。」

アイ「あ、はい・・・。」

2人が座ろうとすると、アイの通信機が震え始めた。

連絡が来たようだ。

アルタイル「・・・？国からの連絡か？」

アイ「らしいです。では、出てみます。」

アイはそう言うと通信機を取り出し、耳にあてる。

アイ「はい、こちら臨時派遣班。」

ウェツジ「あ、アイ伍長っすか！？」

アイ「そうですが、なにか？」

ウェツジ「すぐに曹長にかわってくださいさあーい！！！！」

アイ「あ、はい。」

アイはアルタイルの肩をたたき、アルタイルに通信機を手渡す。

アルタイル「ウェツジからってことか・・・はい曹長だ。」

ウェツジ「大変です！城が、城があー！！」

アルタイル「どうしたっていうんだよ！おい！！」

ゴトツ

ウェツジ「え！？」

？？？「母は・・・どこだ！！」

ウェツジ「あああああーっ！！」

ブチッ

ツー、ツー、ツー

突然通信が切れ、アルタイルは自分の髪を搔く。

アルタイル「何が起こったんだよ……。」

アルタイルは大して気に留めなかった。
だが、これがのちに大きな出来事となって襲ってくるとは思って
いないだろう……

アイ「何の話だったのですか？」

アルタイル「何の話かは分からない。どうせ城でなんかあったんだ
ろう。」

アルタイルはアイに背を向ける。

そのアイはアルタイルの背を見ながらしつこく問う。

アイ「城で何かあったのならもう一度通信をするべきでは？」

アルタイル「今更したって無駄だって。どうせ通信はできない。」

アイ「しかし……」

アルタイル「とにかく俺は断固拒否!! 以上!!!!」

アルタイルはアイの元から少し離れる。

アイ「・・・。」

アイはため息をつき、正面を向く。

その先に、あの島が――

アイ「アル！」

アルタイル「なんだ？」

アイ「見てください！」

アルタイル「ん？・・・！？グラン島・・・！！！」

・ その先には、アルタイル達が目指していた『グラン島』があつた・

＋a

ガイアレス「我もついに・・・星へ墮ちるか・・・」

19年前、忘れ去られし過去に起きた『オメガエネルギー事件』――

この時に犠牲となった者達の数、実に2万人を超える・・・

その事件に関してはまだ謎が多く、未だ真相に至っていない――

そのガイアレスは、今まで「伝説の戦士」と呼ばれた人物

なぜ事件にまで発展したのか

この事件が起こるまでの経緯をたどれば何かが分かるかもしれない

その前に、『ガイアレスⅡシリウン』という人物を知る必要がある
では、下記にプロフィールを記そう。

ガイアレスⅡシリウン

Z・E・122〜189

享年67歳

かつて「伝説の戦士」と謳われていた英雄。

数々の戦争の裏で活躍し、数々の組織を壊滅させた。

戦場から退いた後は「Xews」の最高指揮官として活動が始める。
その在任中に案の1つとして挙げた「アドベントチルドレン計画」
に参加し、500人余りもの子供たちをつくる。

その計画のスローガンは「伝説の再誕」。

その計画案が挙がる前には「オメガエネルギー計画」という名の計画を立て、中心人物として働く。

だがその計画に反対する者が現れ、189年に「オメガエネルギー事件」が発生する。

その事件でガイアレスは死亡し、事件は終息した。

死後、彼の残した「伝説の戦士の遺産」を巡って激しい戦争が起きる（10年戦争）。

その戦争は、のちにセフィロスが「英雄」と謳われるきっかけの戦争にもなった。

なお、186年に生まれた「アルタイル・シリウン」は「アドベントチルドレン計画」で生まれた「ガイアレスの遺伝子の継承者」である。

上記に記した人物は今回の物語のカギをにぎる。

彼なしにこの物語が動くことはおそろくなかっただろう。

はたして――

第7話に続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3621j/>

Re：FINALFANTASY

2010年10月11日01時44分発行